

---

## 第1部 研究の概要

---

本書は、国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略称する）個別共同研究「愛媛県上黒岩遺跡の研究」（2004～2006年度）の成果をまとめたものである。

### 第1章 研究の目的と経過

共同研究は、研究史上著名で縄文文化の起源の追究に欠かせない愛媛県久万高原町（旧、美川村）上黒岩遺跡の研究を行うものである。上黒岩遺跡は、縄文時代草創期・早期の文化を復元する上で、石偶（線刻礫）などの精神文化遺物をはじめ、土器、石器、自然遺物のあり方からみて第一級の資料であるが、いまだその全貌は明らかにされていないため、出土遺物や過去における調査資料の整理を行い、その成果を総合的な学術報告書として刊行することを目的とする。

#### 2004年度の活動

2004年度は、資料の整理作業を中心として作業をすすめた。

7月16・17日に、上黒岩遺跡の現状調査を実施し、さらに上黒岩遺跡考古館・愛媛県歴史文化博物館で資料の所在調査を行い、展示に用いていない資料を借用した。1月10日には、上黒岩遺跡考古館の冬季休館期間を利用し、3月10日まで展示資料を借用した。国立歴史民俗博物館では、これらの資料の整理作業をおこない、久万高原町・愛媛県分のうち、土器については5割、石器については7割程度の実測作業を終了した。

慶應義塾大学所蔵資料については、土器・石器・骨角器・動物骨の実測など整理作業を、のべ10日程度行った。その結果、慶應義塾大学分の土器については7割を、石器については3割程度、骨角器・動物骨については5割程度の、資料調査・実測を終了した。

人骨については、上黒岩遺跡考古館において、展示資料の成人人骨1体の計測作業を行った。新潟大学医学部保管人骨の調査は、同大学の事情で来年度実施することになった。

研究組織のメンバーの多くは、他に勤務先を持ち、悪い条件でありながら、愛媛や東京・千葉の遠隔地に出張し、研究報告書の作成に向けて邁進した。

#### 研究組織（◎研究代表）

阿部 祥人 慶應義塾大学文学部・教授  
佐藤 孝雄 慶應義塾大学文学部・助教授  
中橋 孝博 九州大学比較社会文化研究院・教授  
姉崎 智子 京都大学霊長類研究所・COE研究員  
丑野 毅 東京国際大学人間社会学部・教授  
兵頭 勲 愛媛県歴史文化博物館・学芸員

- 
- 綿貫 俊一 大分県教育委員会・副主査  
遠部 慎 南串間町教育委員会・嘱託  
津村 宏臣 東京藝術大学芸術学部・助手  
古田 幹 慶應義塾高校・教諭  
河原崎 薫 慶應義塾大学理学部・研究員  
山崎 真治 東京大学大学院博士課程  
岡崎 健治 九州大学大学院比較社会文化研究院博士課程  
◎春成 秀爾 国立歴史民俗博物館考古研究部・教授  
西本 豊弘 国立歴史民俗博物館考古研究部・教授  
小林 謙一 国立歴史民俗博物館考古研究部・科研費支援研究員  
永嶋 正春 国立歴史民俗博物館情報資料研究部・助教授

### 2005年度の活動

2005年10月19日から21日に小林謙一、兵頭勲、遠部慎、橋本真紀夫、矢作健二が、上黒岩遺跡、上黒岩第2岩陰の現状測量調査、および周辺の地形・地質・石質など自然環境の調査を行った。測量によって、平面のトレンチの正確な位置を割り出し、同時に残っている断面（トレンチ北面）の現状を図化したので、断面図についても正確な位置を割り出すことができるようになった。

第2岩陰の測量調査では、前庭部および岩陰部分の概略図を作成した。居住空間としての実体を明らかにすることができ、上黒岩遺跡との比較検討が可能となった。周辺の自然環境調査では、岩陰の形成過程を復元し、地形的特徴を明らかにする基礎データを得ることができた。さらに、石器の材質との比較が可能となるように、川原石の石質を検討した。今回は遺跡の周囲のみの調査であったが、久万高原町内における久万川の中流域において、地形的特性、分布する石質、遺跡の存在する可能性がある岩陰の把握を行うことによって、上黒岩遺跡の性格がさらに明らかになると期待した。

石器の整理作業は2年目に入り、実測は200点近く終了した。しかし、器種ごとの点数や技術・形態等の分析はまだ行っていない。現在まで最も図化作業が進展しているのは第9層の石器で、次に第7層の石器である。第7・9層は縄文時代草創期に形成された層で、草創期に特有の有茎尖頭器が多量に出土している。有茎尖頭器は「柳又型有茎尖頭器」と称されるものがほとんどで、この他、大型の有茎尖頭器が極少量含まれている。上黒岩の柳又型有茎尖頭器はこれまでの研究で長さ5cmまでの大きさに対応することがわかっている。これに対応するとみられる未成品もほぼ同様の長さ（6cm～4cm）と厚さをもっており、中位から先端を最初に押圧剥離などで尖らせて先端とし、基部は半円形のまま残した水滴形に特徴がある。有茎尖頭器に比べて平面・断面の形態の変異がみられること、二次加工が粗雑で完成度が低いことから未成品と判断した。調整として斜行剥離を施した例や、近位端に僅かであるが基部作出の意図を窺うことのできる剥離がみられる例があるので、有茎尖頭器の作出を意図した未成品と考えるのが自然である。水滴形の未成品は従来の研究で「杏仁形尖頭器」、または「木葉形尖頭器」とされた一部に相当するものと考えられるが、未成品という観点に立つと、これまで詳らかでなかった有茎尖頭器の製作工程を具体的に窺い知るこ

とができる。「杏仁形尖頭器」または「木葉形尖頭器」については、もう一つの群がある。長さ10 cm前後、幅5 cm前後、厚さ2 cm～0.5 cmの大きさを持ち、先端が細くすばまり、基部が幅広く概ね両面加工をおこなっている。この事例は「先端」の鋭さを作り出すより、中位から「基部」にかけて丁寧な細部加工による作出が窺え、「先端」は概ね粗い加工の場合が多い。こうした細部加工の多くは器体の中央部に達するものではなく、縁から中央部方向へ0.5 cm～1 cm幅で連続的に施されている。こうした加工は両面調整の有茎尖頭器や尖頭器類の製作技術と明らかに異なっている。さらに「基部」を半円形に整形した細部加工の事例が多いことから、ここを刃部とみなしうる蓋然性が高い。江坂輝彌氏が「杏仁形尖頭器」とした事例のなかには「基部」を研磨した両刃の小型石斧とすべきものが含まれている。したがって、これらを「杏仁形尖頭器」または「木葉形尖頭器」とするよりも、小型の石斧またはヘラ状石器と分類すべきであろう。上黒岩の事例にもとづいて突槍→投槍→弓矢という変遷案を考えた鈴木道之助の仮説は、上黒岩の事例では成立し得ないと認識できた。今回の整理作業を通じて「杏仁形尖頭器・木葉形尖頭器」とされてきた小型石斧・ヘラ形石斧は20点近い量があり、有茎尖頭器に次ぐ定形的で安定した器種であることが判明している。この器種はこれまで上黒岩だけでなく、草創期の遺跡で注意されてこなかったものである。今後、当該期の石器組成を理解する際の重要な要素となったと考える。石鏃については、これまで上黒岩では7層から現れるとされていた。これは鈴木の見解に密接に関わるものであった。この場合、より下位の9層の矢柄研磨器をどう考えるのかが重要な点であったが、不問に付されていた。矢柄研磨器は少なくとも3個体あり、上黒岩の石器組成、草創期の道具立てを理解する上で避けては通れない問題である。汎日本的には上黒岩9層段階に並行する時期は既に石鏃が出現している。この点を踏まえて遺物の再点検を行ったところ、2個の石鏃を見出すことができた。このことによって矢柄研磨器の存在を考えやすくなっただけでなく、鈴木仮説は石鏃の面からも矛盾をみせることになった。石鏃すなわち弓矢の出現に関して新たな仮説の提示が必要になってきたといえる。

人骨については、2005年6月13日、新潟大学医学部所蔵の上黒岩遺跡出土人骨の計測等を行い、大部分終了することができた。関連する人骨の調査もあわせて行うことができ、有益なデータを蓄積することができた。

調査記録の整理は、2005年8月7日、調査参加者である岡本健児の講演の記録をとり、2005年9月4日には、愛媛県歴史文化博物館において共同研究者である兵頭勲が中心に行った企画展「上黒岩遺跡とその時代展」を共同研究メンバーで見学し、展示資料をもとに議論を行った。これまで、知られていない上黒岩遺跡の資料も確認され、当遺跡の資料が極めて多くの場所に保管されていることを再認識した。また、関連する洞穴遺跡のなかで本遺跡の資料は際立った質量を誇り、本研究の重要性を改めて認識できた。国立歴史民俗博物館所蔵の資料も展示され、企画展期間中は7,000人の見学者があった。現地で測量調査を行った際に愛媛新聞記者の取材を受け、そのうち年代測定に関連する部分について2回の報道があった。

研究組織（◎研究代表、○管理進行者）

阿部 祥人 慶應義塾大学文学部・教授

佐藤 孝雄 慶應義塾大学文学部・助教授

- 
- 中橋 孝博 九州大学比較社会文化研究院・教授  
姉崎 智子 京都大学霊長類研究所・COE研究員  
丑野 毅 東京国際大学人間社会学部・教授  
兵頭 勲 愛媛県歴史文化博物館・学芸員  
綿貫 俊一 大分県教育委員会・副主査  
橋本真紀夫 パリノ・サーヴェイ株式会社・調査研究部長  
山崎 真治 佐賀市教育委員会・非常勤職員  
◎春成 秀爾 国立歴史民俗博物館研究部・教授  
西本 豊弘 国立歴史民俗博物館研究部・教授  
○小林 謙一 国立歴史民俗博物館研究部・助手  
永嶋 正春 国立歴史民俗博物館研究部・助教授  
遠部 慎 国立歴史民俗博物館研究部・科研費支援技術補佐員

#### 2006年度の活動

2006年11月1～2日に、愛媛県埋蔵文化財センター・上黒岩遺跡考古館（現地調査）、2007年1月19日に全体研究会（歴博）。2007年3月にパリノサーヴェイ株式会社の協力により石質調査を行った。

本年度は、土器・石器・動物骨・調査図面の整理に分かれ、それぞれ研究室等で図版作成等を行った。特に、石器については、遅れていた基礎図化を助けるため、慶應義塾大学保管分の石器類のうち、200点について外形図化および剥離観察用写真撮影を専門業者に委託し行った。そのデータを用いて、石器担当者が図化およびトレース作業を進めた。土器については、昨年までに作成した拓本・断面図をトレースし、図版組を行いつつある。動物骨については、基礎データを整理した。遺跡の図面については、昨年度行った測量図を整理し、慶應義塾大学に保管されていた断面図・平面図を整理して、遺跡調査区・層序を製図し、トレースを行った。また、調査日誌を整理した。研究成果のとりまとめの一環として、総合誌『歴博』139号において、「土器の始まりのころ」として特集号を組み、上黒岩遺跡の整理から得られた成果を一般向けにまとめた。

1月には、成果をとりまとめ、れきはくプロムナードにおいて研究展示を、第58回歴博フォーラムにおいて講演会を行った。

#### 研究組織（◎研究代表、○研究副代表）

- 阿部 祥人 慶應義塾大学文学部・教授  
佐藤 孝雄 慶應義塾大学文学部・助教授  
中橋 孝博 九州大学比較社会文化研究院・教授  
姉崎 智子 群馬県立自然史博物館・学芸員  
丑野 毅 東京国際大学人間社会学部・教授  
兵頭 勲 愛媛県埋蔵文化財調査センター・調査員  
綿貫 俊一 大分県教育庁埋蔵文化財センター・副主幹
-

- 
- 橋本真紀夫 パリノ・サーヴェイ株式会社・調査研究部長  
山崎 真治 佐賀市教育委員会・非常勤職員（現在，沖縄県立博物館・美術館・専門員）  
◎春成 秀爾 国立歴史民俗博物館研究部・教授（現在，同館名誉教授）  
西本 豊弘 国立歴史民俗博物館研究部・教授  
○小林 謙一 国立歴史民俗博物館研究部・助手（現在，中央大学文学部・准教授）  
永嶋 正春 国立歴史民俗博物館研究部・助教授  
遠部 慎 国立歴史民俗博物館研究部・科研費支援技術補佐員（現在，北海道大学埋蔵文化財調査室・特定専門職員）
- なお、報告書作成にあたっては，共同研究メンバー以外に下記の研究者の参加を得た。
- 矢作 健二 パリノ・サーヴェイ株式会社・調査研究員  
志賀 智史 九州国立博物館学芸部博物館科学課・研究員  
本田 光子 九州国立博物館学芸部博物館科学課・課長  
吉永亜紀子 慶應義塾大学大学院・院生  
岡崎 健治 九州大学比較社会文化研究院修了  
小林 尚子